秋風庵文集 坤

2
81
71

中村俊定文庫
文庫 18
839
2

楊風斧文集巻之下

秋風菴月化著

京都帝国大学図書館

芭蕉翁傳畫賛

文は代の衰と共に道天下乃溺を救ふに韓退之乃好小蘇文忠書ゆとなむ西行と申ひ〻是其實を存せるう有り風骨をふまゝ〻とゝめ〻宗祇依歌大槩の説なり檀林の斧を入〻西風の一路を伐開きゝ此翁なるう歟此翁なる哉

上田三段

柏くゝる友とちかひて此庵の夕花の料ハいくたの乃田をうゝせよしと汎法し終よこさんはうをうこうゝゆき朱帯して腰をわるれむつらしけりをく て月毎よ五斗米のあるゝとかなるまき淵明の秋を待しふ岩よ醉んうゝめゝや

手うゝ〻ハ成長所そゝれをやゝのほゝきに耕耘の時をとゝせゝ必す岩よ

そゝ雲乃うゝ聖つゝむ留まて

筑紫題林集序

大伴のつ乃長とふたくしに此国ハ仇きもるゝゝの城うゝまきゝめゝゝうゝゝりして南氏此業のなゝるゝ世の古よ行ほんとき者ゝゝしそれのゝゝ或ゝ開屋をうゝて往ゝ

人ら名ゑ為しめ武ハ城を築きそなへみるよの
水城なと呼なる堵賊を防人の備まうく
らうはしき世のなるそしにたりむ今やそ跡
ともも尋の住ふとて斯も并平の化乃及る
そ作きくも狩あまりたりれさてこそ文雅
乃徒茅も子里ま輝をつまる西の海路乃
歌枕乃名也といきなる浦浪もえいた
唯行ものなしうも海を渡れる風流
いそむい文明ま宗祇おしたり幽法公ハ
天正ま末ま世ま此外るもあそれる此ふと

まをたくし紀行と世の人もにすきめりちハ
あきをいまと潜歌のこころなるよりむとくあり
と中文化のとしまし春坡といるすきの九つ
乃国人ハ此きある四季まわるゆく面やら
なるるを乃歌まてを拾て一冊ま成ま
閲人是ま五とせの労をいのそれと又ま
ま本い遠ま見ま雨

夏相辞

仲屋の裏北方より一井あり其傍より一丈と
乃桐の木とを植り直幹亭々と数十尺園に
三十すゝもの繁きるなり〳〵植りし時を考ふ
るに廿年を経たりしも其葉して
佳とやらんもの削られ変じて怒るも
せずして異人のごとに焼せく焦尾の名をも
彩めすまして大和琴作〳〵夢よ来らん
娘子も待さしを八月鶏啼なる塀の内と
そかなるもの吟して古翁の他を変るもよすら

まるものゝを或日人来ゆくるまき材うれ
販きたるまゝ得まゝとゝつりなるさる
事乃あるよ後うしてあるゝしき名つき
ゝるこうすれば花咲るゝ清明の日を
告一葉ふるゝ天下の秋うとゝゝあるを
いてひんなう絶さめやとゝけるもいらへ
つるふさゝい庵主ハ法木の性をそうとく
知すよ杉杉の数ひゝて根うり伐ハ再ひ
生ねゝうきるハ此すゝてまるやいる蘖
すゝと伸出て後を親木ゝも勝れるまを

其生先まさ楽しくしてすやなくせらる設つ
二升米まも代るそうの料をさし置く頃て
丁〻と言さすまうおきらめし甚本しく
文机の具作るや又火桶のこしひらややしハ
まくたるるれいつまもすめ嫁うとてく乃
調度めくまの造らんの料うやく図へそ斧を
撫らくくくう笑みつまのきハ殿を挽く鉞
業とす桐の柔弱なるちくをも入きすして
こくらの度を挽くく妻るれにを糊するの外
むつるけれるこくす事ハ図こうを刷ゆまも

とうの〻出除うち放しとふさたく柿の袖打
拂ふくいぬ嗚呼非情の物なれといくとし
ひさに見馴うるひものをせめくことき器
まくまるさて終まハ泥土よ身を果さすう
れくうをと祭うたやせつるを悔さつり
しまる風友の居りたるいらく殿とて安ハ
まいやくとのこたうちうの法うゆくれて
支郎まくても安石庸楽をそしめ同人ま
図めるまくくくハ其人くの傳まくるせり
さうとも女のそけるもく作をる笛まハ秋の

鹿もうめ来るこゝハ罪深きやうなめこゝに
役のふ角や教待法師なれ行歩を投げ
よいこゝせこゝと問けゝ其縁を引きても悉皆
成佛乃拾ひるハ洩るまゝなと体あるこゝよ
暮てこゝくるも早暮こゝ東山よりのぼれる月の
いつるこゝろて物たさいこゝすこゝちよはこゝの乃
徳を照さこゝとうちあまてかこゝろハいひこゝれ
ふこゝ案れなこゝとおぼさむ秋の月

伊豫日記序

日記こゝいふものの表坡もこゝろみんとするよハ
行こゝさあきこゝやこゝもゆうちいこゝをゆていまに
つけ雨のほけ旅宿の秋乃なこゝさ見るも
ゆも感あれそ日の空こゝいもるこゝ且おくま
述こゝ加こゝさのこゝこゝせに関さる人と毎こゝり
いこゝ月記こゝ無しあるをめこゝも耳馴こゝ
すこゝろの題せるこゝろこゝさるを御書所乃土佐
てふありこゝんの對こゝく歌けこゝるやこゝおし
こゝこゝひの思ん人もあこゝそかこゝけこゝいこゝく頭

に仕まへよろしにあんなる小紀氏のかい給へる
中にハ海賊の事あまた所にかきしるし給ふを
みとせのほとよみてすら膽つふさし心ちしき
せしにここの船路てさるおそろしきよ
憂ひも聞へ侍らのふさきるにも浪風やすらか
なろうつくしさうなりてなん此一事のみ
よきれといふそむかしよりなく太平乃世の民よ
うまれあへるさちなりけりそハ百日ゆく濱
つたひとも人ハ道を讓りて里の山を越ん
よも枕をたかくして臥へし笠一蓋杖一本のみ

ふふもたらしそ四海皆ゝ萬国ゟ遊歴せハ此
時てむかしけなき君か代なりけり

浪華の某里よりの消息

ちかひ賜はりし御書中に此之候ハ當時西の
國まて乃俤を伊勢の横堂と我ものかと
先以あさき顔なる候ものほくのわらわ中
謝候得共過當の附會ニ恥入候それよさらち

くらゐ法眼に候はゝ素堂の法眼なるべく
とそ存ぜられ候よし五元集を見るにつけおもしき
事ひとつと思ひ侍り俳諧の道に入るの栞にて
この流を指さしてさて其時乃師匠を慕ひ侍る
清水氏骨氣老成貴ふに彷彿たりと世に
聞伝へしも程なく物故と聞候ゆゑ乃
高弟洒の口秋を因とせるもの多き猶
尾を敷き侍るにつけ本にしてひさしのつゝみ
ゆゑに判とせひ新波は乃人に句をのこし
あしと詩に合ひ候三十年の俳業に至る田

舎門生のみにて梓に鏤め候是知命を
の作にていまだ古撥の調にのぬ也とす侍べ
因流乃法等にうれしくもてとゝ書侍べ
そとに一株のそせを芭蕉陰を仰よて学ひ
侍べはまにに何流角流といひなくそせ
しにおのつゝ水波の淵あゆゝ交を深く
杉稲里候にて其のち蕉門と唱へ俳人に
まも訪を侍べにつけはゝ名を志
られ侍べは此十年に伝ゆるもなるべく侍べに
樗堂に素にゆ紙一乃蕉の名望の人と承侍

たゞもとく家事を顧みゝ妻のてゝより浮世よ
り月雪の外更なるまとゝ閑居にあらも
ハ老くまゝ窮れ精しきに到るまゝ
貧しく俗我等も退隠のそしめハそれ等
しさ素志よりく俗ひしくそかゝすも孫かこ
ちゆらゆのとをとりの身をおつる事いてまね
るをいま年娘と悼める中より述俗ゝを
いそすかるうれるまゝ俗ゝらゆ知れんふ
故の出まゆく朝より米銭の活計より苦むを
夕より花鳥の雅事より楽く俗いんとすれを

又打うふきるる有様より風ふも妨られ俗
奥に又寒湖のまいに茶ゝ自恣世るれ調よ
物ゝす一枝をゝてとゝわせゆくく大江九ゝ
はせゝれ俗此人歌逸凡ゝす寡毒を保
ちく閑の楽より佳詩を残ゝれ候是も及ハ
ゝるれ幸ふ幸を雑せそのやゝ右より述
ゝゝふ等しく俗いゝゝゝ二文の俗徳を望ゝ
ゆうさんや昔歌人の中に隆信朝臣宗長臣
一つゝひの梅あゆしもひゝかハ世よかゝらひく
公務行ゆ知ゝまゝてすけて寂蓮法師の名

あまりかくくちも左右なりといふ事なく
徒法難有やく死せすして道の恥をかゝす
との歎有しと涙ぐ候悼入候ことへけるも
此人々の述懐更ニ人乃こともか方候えす候家
これし六十二歳にて且老さか日暮途遠し
以来の法意も日々衰へ行くへしと悲しく候
白髪の長き根なしことも独きも我露常
往せる実情ともくむし孫をもみてなし
憐とも思え給ましと待ひ入候究賢
文化己巳年

木綿山つと

豊之国乃由布山産のとくあめかし山の裾野ハ
なるかひんかし此方へ越て行人乃通ひ路なか
其左右すへて芝生にしてところ井ての熊子也
はりとちらけ一寸余ま二寸ほとにをよて其葉
其花形さその色濃きあり薄きはかり似たる
やかれとハ此くるるその色はへりことまとく
れかきつゝそたなか一むらく花をなして目も

あやまりるとこそてをのぶこの山をと
らきるまにくも
面りてゐハハもをもと杜あ
こいひとせをを豊東紀乃海ゆ中ゆ加て
二十位ものむこるゆるを予ら母上ゆ草れ
筆を好くまひしら頻ゆる此ものあく結ひ
て彼あこ里行ゆ人ゆ頼こくを拓乃際を
度く宮ち其拓き土をくつけくをてこたを
根このまねんこるつひあつくをくうし
植たるひてゆ乃こくく愛せられ後

よく錦出されゆる幸こゆたる業をゆう
蕃ゆぬをれハ所異なをを風出るあをや
いくくゆもの吹へまををゆをひをゆけくゆる
ゆ東こ輪まくく吹出るを居ゆくるて
興しぬ
ちひをくに咲るあやめゆゆ

筑紫琴ゆ法集歌
八朔坊ゆつくく琴のをくくをハをくゆ

ちくせの人々のうたて其青をもふれるなるべし
やゝ爪休ませて又ゆゝしを戒の浦四て
いつもさゝなみ軍人乃國をいとゝす 頼
なる字品百乃為人まとゝ道のこと葉を
述させかゝてうち過る鼓ゝ瀧いとゝ山川の鳴る
よりとたゝうふ國出し豊國なるゆゝ此寄
ちろくもりんゆるくらゝんを坊まゝ佐と見
てゝゝゝ此續きれるゝ巻いつゝゝゝゝゝと知
さるゝゝゝゝ此坊のまゝ脱ゝ耳の覚未ふ
さゝいふゝるゝてまゝとくゝゝぬ人のふいを

なゝゝまゝゝ心を得るをゝゝ秋風庵ゝ跋とす

八朔坊稱夷柏阿波人其人目眇且聾故戯及此

梅百乃木像を法華寺に送る序

京因幡の門者なる西園下函と彌せゝ家
住める貝田の庵なゝ風骨学へる師ゝ背す彩
巻いとゝ法集ゝ送きゝ又別ゝ技藝の妙
いゝゝゝ東都ゝ赴くる此日ハ厚くゝ便の頼賜
をゝ家ゝゝゝゝ巻くゝゝゝゝ述すゝゝゝて

刀法をこゝにあらはし師乃恵を追慕して
きつゝ雕刻せる翁の肖像の肖をるゆく
末なくも我庵毎日迎へ置きつゝれて年毎
乃文月をもたゝ仏や家の食のそなへしに
きつゝみ五彩堂のあるゝ此像ほまなかさあ
らそ一宇の堂いとゝ安んゝ置きつゝせむ
とそいるさつて此像の傳燈を挑け来つる此
河宗ふるむめきそ世とたゝふつゝく如去の
敬をも盡さそ仏ゝの田舎なゝきゝそる
ゝくも在庵こゝ十餘年乃名殘も惜み侍

きそゝもゝ此ほゝれの古々経波はちゝれそ
蕾のゝ在此夢ゝ生きそゝれゝ此寿
いゝゝんゝきそゝ迷ゝすゝるゝ霊
魂そゝ幽老のそゝろそせゝかるゝゝそと
ゝゝゝまゝすゝるゝはなゝぬゝらんのち
よのゝそゝもゝそしゝて七世此孫ゝ仏風とも
みゝゝそゝゝいゝゝ其業のそゝゝゝんん
そ菩ゝゝ世此ゝゝ拜ゝゝ庵外數
百歩ゝ見送ゝ恭らす

花乃山踏

此花江南所無也於一枝折盗之輩者
任天永紅葉例伐一枝者可剪一指
壽永三年
とありしハ弁われの文山翫斎の筆とて須磨寺
此什物ハ世人皆知れる是なるを右制
せる扇の半面に書る詞
文化年中ある者乃此みとり野に出家せる

人の中にひとりの法師ありけるか東乃櫻
手折らんとつまさきしけるを此めくみ乃
番人見咎めてとらへ捕て寺乃某
の院へ連行く所の作法によりていまにも特に
此僧かくろうかさまをいかにしたる何やらん
認めて示すを見れハ

梅の指さくらに捨る命かな

とありたに捨せる人ゝの筆の内に稱嘆し此も
縄もゆるしけるとなむ乃枝をも折添て与へいのちまて
さんさよく繕ひて久しく世あれと僧へ添える

即ぬのをとこ風流の極るこゝろ的るむしめき
く物語の思ふるみやびを今の世まで也蘭
つるまゝ知と中生る一世代中より或人すこ
出く腰なるあるひきく凡もの
くゝ其句の故こゝろれる扇面の石板を
是なるものをこゝろあ〳〵持合せこゝろくゝ
此こゝに方り件のいまゝ深かくゝもこる
まゝるこゝを首の俤を遊仕り筆の浄小
すつまゝ詞の一筆乃こゝる
梅こゝに制れる書〳〵櫻の事まして

梅こゝあくす既る江戸の浦十番ものの木
の梅と出こゝを行のもこゝれも世人
梅こゝのこゝ仕こゝれ江戸名所花
いこゝるこゝ中この僧もなれ〳〵こゝ得〳〵
こゝの佐こゝ江戸を好まる
たこゝて益こゝ唯世俗のこゝこゝる
志摩の浦乃こゝ漁田乃梅の乙姫大江
山の鬼茅ヶ崎我堂のこゝ得こゝ仕こゝ

隈川産魚譜

豊國のみぢかきかたなる日田の縣より隈川と唱る
ものこれを此国の隈日のくま星の
隈に歸けつる三光乃なる日出山乃
此川中にもてれそこいつるやあるむ且
流をこの隈めるみ戸よりの人家より隈町の名も
あるべれいからくこのものところなるんうし
源南の方ハ肥のくにらなるたちなる國とひんしハ
秋珠の郡このこ川を今ハ一ハちにたれて
爰よりて則底なるものとこれを見り

住るいろくこのこれを見る中にも鮎をもて食品
の美味と稱す理ハ書帰り毛蟹くこれ
家峰紅葉するこのこにもるまくもも海士人の
多くく獲こる魚ハ殊よくこくこ有るこ
十三里海をもれるこ中ハ失ハ得る
こと有こ海なくねそこるみの澤き
も知こくこく鶴川のかるを失奴婆多麻乃闇
り濤くく其外ものこくこ河くこくこ
多こりこのするこるこ見ホ乃葉をて月此狂法
もいわこくこて日こくく肆る魚を絶こす夏昏

乃至膳所果たるに及ぶまでは斯る嵐の
はしめて身を入るる所なりしかの方五三里隔ち
間の篭をかけ置くこと數十所河水の流業を
催せて必流をる順なる魚乃心を計れる
成べし猶の誘ひ水あるべきに付事あるべしけ
なるよ而は降るべきに成る後の朝日の西に
なるまき出てるこころ四篭に入てやるる
まめさるべきは此時なりけれは事日は出るよ
數千喉の魚節を満ぬ其形ちかるちちさく
うひに肉高くあるかて太く逞き年世るの

渓鯉の数ひせす敗くなのごとく杠秤てとつよ
一尾の重さ八十目ようかの目そかるを言面
乃物をとるわるに三四十目を加るを家
ふをすべきをる人うかくにものきむし
一行なるものを見るかしら今はあるとき是
更ようきをる事とも聞えすそれ通あ
んよ塩らのいをなりかとてひ高豊の毎人
許よ捧んようさひとく又仰ることあるよ
いるみせむふ空の出るべきあるべきてハ烏滸のるきな
まをひあているこをす其隠せる物ををしく

殿たちすきの方こゝに有るハ滅多に一笑すべし柿鮎
よりなをしる國九十あまり都のあるゝなるハ
歌人乃景物ゆゑ今せつれ浦川ハ氣長き姫
乃尊の釣られたまへし故事を傳へ
生澤川を風ひ物よ作わく題目ゝのぬゝある
を汲量其餘の國くハ或ハ白砂千子龍ゆ
或ハ肉醬うるはなりに製して名物の數よ
筆ふなるべしこゝハあれと皆魚の大なる沙汰
よりもひとゝ岐阜の產をこゝいられを
思ひきゝとゝれ義濃地をゝ搾し

ゝまつり市方のおそせしゝ家ハ和鮒魚
よハ汁すゝ魚ゝ物ゝすゆゝゝ作ら
きゝきゝあゝもよハ隅川の鰉をこゝ銀口魚
中の主ゝ鱗ゝよゝ家ゝゆゝゝゆ此魚を
たゝみゝゝゝ所のもゝゝ試ゝゝゆゝ
ゝて肉味淡ゝゝ旨ゝゝ腹よハいゝこ
ゝ交るゝ易年寿朗ゝ古も持ゝす
ゝゝすゝあゝを宮めんハ長源のゝゝなゝ
味も又殊きゝゆゝゝゝゝゆるハゝゝゝのあゆ
なゆ口ゝゝゝくハあゝゝゝる事あゝ日田

よしなきものあれと世をそしれさる
ものいなくもなけれとそれは主つ國人を
對せん語の柄なるも染み移りしく事のすきを
よしなく記しそくことなるなむ

休俳帖

此度の旅ゝ庵名整をつくりて外開の
こゝろを行ふを辛い又遠く東北

の方ゝより文通あり去年よりの又ことゝと
因ゝ求め来俳人の新さゝり頭俳は道乃
業ゝとゝゆゝくゝあいゝ可申ゝて候
ちゝるゝて馬齢ゝつゝゝゝ木春は古来稀也と
いゝる年ゝ成候ゝ身ゝ宿疾あり殊ゝ業の
ふゝ自ゝとゝゝ佛法ひゝ報ゝの會釋ゝ堪
ゝゝゝ俳句ゝ以来俳の事は時節の感慨ゝ
催ゝれ候ゝてゝゝん乃動ゝ俳ゝ一句も可
中ゝ弁ゝ格別ゝ心ひゝゝゝねゝ出せる苦心は彩
めゝ乃俳年ゝ氣随ゝ新ゝゝゝ賤意ゝ

寒ひ侍らゆる候得共嬉しと承
候とも其時〻應答不申候ゆゑ御もらいの
段いなんゆるし下さるべくとかたく又言葉力
を得候時も御坐候ゆゑ如何ともあらず企ても
世動静を伺ひ候事有へく候是世ゆゑ
申ひらくとふ〻乃文ともに返しまるとく
徳俗侍る戎人の居候ゆゑ事ふるを
笑候ゆゑとも敢す狂句

是風ふせぬと筆乃寒さ哉

とゝまれあるも年ハ悲しまるものゆゑ候

斯ゆゑ〻慶人ゆゑ寺しき身ゆへ向未徐者の
子細を申断候ゆゑ〻ゆゑ〻ゆゑ〻雅情
をくゆゑ捨ゆゑ〻の風流ハ行〻ハ出
乃され候へ〻し老屈の弊を伸しまく申
とゝろ〻候頓首

文化十二年十一月　六十九歳

いさゝ那乃肉を謝て
みを多乎鯛ハあるとても塩鮭と芭蕉の翁

乃すせられし同し比なしも唐津なる五雲
の君よりも其皮肉をめくみてまつりし翁よりて
鯛あかくてに賞翫句のことしまいらせ此地
ゟ櫻の名におもひよせてなりし花ちりしのちハ
其鯛さへも来らぬなれハやかて絹しく
こゝへ侍るより昔見に短くなれなくハ風味
似るへくもなしおもひよや海上寒風の中まで
の獲物を今此炎熱の山家にして喫せんとハ
理なや梅見羅漢にあれ賜たまれたまわらぬ
霜の日もおもふ人ハ涼しさ増らむ

明府君よりの御賜をて賀莚を設く

席上乃言葉

いつくよりもとはらせまし世の中にたかやてるよも
ひとしき齢ひまねつくるには獨こちむ打侘居
こゝかしも時ならぬ愛し憐ことまつる是なまし
詠しく折よりてそれそしたまひて甘旨の
その等しよ之をしかなあくすや なかしはらむ
こゝろみよりみれむまくしも是へ万里にゆも

いま[illegible]方[illegible]より得させ[illegible]る星の井
て[illegible]三[illegible]酒より肴添させ服[illegible]くれのも[illegible]うのや
孫[illegible]宮つ[illegible]ひて世[illegible]へ[illegible]物く[illegible]の後を受
へ[illegible]との知[illegible]せ[illegible]ことを[illegible]ものて[illegible]ハ天晴
乃[illegible]ら[illegible]と[illegible]ま[illegible]なりまき脱[illegible]れ[illegible]の[illegible]
ま[illegible]く[illegible]揃[illegible]れ[illegible]も[illegible]使[illegible]ま[illegible]
備邦の侯家[illegible]ま[illegible]て[illegible]て[illegible]菓
兩品[illegible]を[illegible]別[illegible]ての御賜[illegible]
う[illegible]る有[illegible]を[illegible]袖[illegible]も[illegible]を[illegible]て
富[illegible]の[illegible]風[illegible]の[illegible]極[illegible]侯[illegible]音

也の嗜[illegible]より梁乃塵[illegible]ハ[illegible]て廚の方
より器皿の類ひ[illegible]揃[illegible]膳[illegible]筆[illegible]て
[illegible]仲人の[illegible]れ[illegible]給仕の役[illegible]見
孫[illegible]ハ[illegible]ひ[illegible]置[illegible]
[illegible]
[illegible]或ハ[illegible]の膝なるハ
[illegible]
其中に[illegible]ハ多り髪[illegible]皺も
仲[illegible]地[illegible]て猫[illegible]
[illegible]花[illegible]ハ

ようく男ひとみるやうなの〳〵笑壺のこゝを
催すも皆おほんいつくしみの深く篤きにぶれも
とゆるすまことおそれ〳〵かこまりて拜謝
し奉るものなり利
あめ霞の外まもるのこんつゝれ
文政戊寅八月廿五日　七十二歳

諸集の落せるをうゆる誤りをまぬ
朝顔乃如見い日は常ゝ山掛哉

釣狐の狂言ゝ
うゆるゝ世こ寺へ初出やれ何も馳走ハあるれ
ゝも昆布に山椒らい茶をようさきゝつゝる
伯蔵こゝらいほゆれさま垣根蕀なく這せ
ゝゝんゝの見こゝみゝて新茶の時ふゝとゝゆ
ゝゝせゆ如ゝうゝ古ゝもゝく趣向ゝ作ゝ
ゝゝゝゝゝゝ甘い語のゝく用ゆゝ一ゝゝ
ゝゝゆゝく八一句れ浦なゝ
但繁ゝゝゝ細ゝゝゝゝゝゝの書ゝ
山ゝのほゝゝゝ事ゝゝけハ文ゝゝゝ

切なる母うとて思ふあるハ行基僧正の歌
みゝゝ聖者一切の衆生ハ皆我父母なり
と梵網経乃文よりゆてゝ給ひしとゝ
又古今の高野山ゝく父母のこまゝゆよ
忘し難ゝ雅ゝ辞と聞えしも是よ基き
他ゆゝめとゝ云ふる拾遺の中ゝ歌生せる
ゆゝくにして文ゆ耳とゝ聞よ調よしゝゝ
わゝと一句のゝゝゝ読くゝ読ゝく雅なる
ゝ然ゝゝ細ゝゝ眞名字ゝ書ゝるゝのを
いふ解すまゝ ゆ知意理よ解 すゝも

味ひなゝるへし
仰向ひゝゝゝゝゝゝ雁ハゆゝれ
ゝゝゝゝゝゝゝハエケセテ子ヘソレの五音ゝ、
力ゝゝゆゝゝゝ弱未乃ゝゆ於篠
なゝゝハ切ゝなゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝゝゆゝよし
垣根なる雞鶴ゝ二月の朔ゝ
東風の凍解ゝゝゝゝゝゝゝ雞の離ゝも引連て
墻花の土ゆゝ拔ゝゝて撫ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝむゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

其の景氣をよく述べるなりけるとを弱と
きこえて墻根乃翁何事とや壽老人
林和靖の問ひしに此句を解するに
琴をもてんむちゝ奇こいせの米あるる時
雲たちくれる龍すむこつもと葉ゆら故の
とゆくらめるを因翁ハ澤をこうすめと
雖しきりひ基後朝臣の失たるこ
女文字を書きこんをハ清濁のこちめいころ
つきゆしなるへしまこと鶏と鶴とをこをま
よも國字をもも書違ふへきこと

ふつとんゝ鶴ゝ霜花代鳴こ羽
是ハ又翁なるを所と設れり所をしてハ
其情薄ゝ夜の霧乃ゝを思ふこと
いつをかゝてこと花の字の淡もあるめ
古の五章子ら句ゆるを難波ゆこゆ代人の
用こを任せゝ集ゆこ川又をゆものてか
そのに樣行ゝく世乃ふ流布せるを損
斯乃如く句言を害せるを見人人ら為熟
の程を詳せむこ句を人を歌を汗をゝなり
をゆこゝ稍情をくをせるこをを世をハ

悵ミやるべきよかたもなし又えとりしにいひあき
らめむハ百里の野を過ぎ心氣を放ちてもむやう
りしきるとりえしかくて常にもしもくら
惜かりし我日書ハ精ともさるるてとてあまさ
くりよおもとえしくよえつる中に
はいよりみちとれてゐて咲しろと
しを
まの字をうへおかれをさうり里。
此とよりかくかりよしくハ一首のとちめあし
くて感慨すくなし
嚼
夕されをさるのうそく此川風よ

友まとハしろくみゆるゆくなか
川ら都此いろふしく乳るをおもとハしるむ
うかりつる人をさつ遊の山おろしよ
あけられをハいのちぬかのを
山おろしとはかりよく押字に落つるまつる
己の人り清み味を卿し
新
ちんしくくろうことよかれ。
なちとよりつきとあかくくてくる人くれ
もつらのかよてハ誤りかくの通りなり
餘ハおしくちる人しうれも俳人女子のち手習をと

導くことあるべきを百人一首三十六歌仙なと取あつめて杜撰せるに見ゆるは多く書肆の手より出ることにて責るふるくねとうるはるらるるを頼しうる葉ハ孤の中より右の歌あらすゆ珠の日蓮寺ハ平生にはすきひく清記性せる歌なりの写本をそ不圖詠めるとこ印板せるあらしめ再思をそ校合の後著つよに徐深ひそうりなり一古人物ものることあるそ泉下より眉をひそめるべし和歌のうへるすらかる所あり よいてとち

俳諧おのつからをもひ初んすへきをもに初んすへ
しあしとかねての向へきをもに精く
言の一変をもことし是ハ法華をも自後をい
ひ乃ちをのるすへ人乃ちへハ思ひ咎めに
只一巳の業ハ過失するるむ事をを怪を
くて老年を悲む外なり工夫ハたるりよ

七つ目宋の賛

俗間より十二支の中我甲乙より七つめなり
学れるものを学ぶべし寿福を祈るには
支那よりも道家なるに似たる事あり
其遺風なるべし森乃楚濤牛を画せて
黄を求む此言の七数を学ぶべしいひ送る
こと無

うつしけるもの　大内の御車牽るより
稼穡乃資けなるべき此年の功労あげて
計るべきなり
宗廟を祭るなるべしなるべし

なれそ預べきなるべしなる神祇を祈べ
す釋教なる親べし
隠君子は変べき水上乃水を飲ひ角を
抱きべうべうも喘べを用て高なるも
皆賢者なるべし
べべは戯を則て和順なるも人主なる軍
陣を用ゆるべは猛き事前なる
べべむ中に妻帑あれは輝て含べす是を使
左べ右べ進むも歩るも皆人法を解べてべれ
下知なる間べは識なるべしなり

庭訓往来に牛を記せり但てるよりは
犢の事なり甚國より四方に販きて高貴
乃屋を潤すなり彼金牛罡の名而已傳れ
りて勝らん
桃林の野に放ちき太平代に化して走るかや
風流乃徒に頭きて黒牡丹の鞭を引柏
老人宗祇なりしに問めりと聞けて甚生質
無雜なりしもあらしを思ふる
そ後の七月生れ乃牛を
此物乃七事を稱する假名の韵なり

ほも五音相通せり

うゑ津ふり

あらしやこの山れたる雲の龍田の川
乃錦なりけりとよめるを人和歌に散るを
とも又流れ来るとも云ふ其風情を
せるたちにて西川のふるよりんる雨
法師の物語りて秋風吹渭水落葉滿長
安とつくれる同格なりけりと人説なり

雨嵐中明く木下乃蝠牛

たゝらのひとてゝ或人のいつらく此句も
このむ此枝上のそひのたゝみるとゝもよ
まゝはゝそれしゝとも いとすゝ品其意をもせて
たゝちふ樹乃物語をんこる者の結形と同格
なゝよゝしゝ評せゝ其評の是非ハとゝれ
思ひゝつる事の如しゝれとゝ男ゝいつく

富士禅定

まゝゝ多東都を起つる廿駿河町の横ゝた
しゝ中秋を雲するとて西の方を遠く望
めいゝとゝ降積をゝ
名月乃雪ゝゝゝゝ不書の山
ゝひ出ゝゝゝゝゝの高根をゝもわさくゝ
ゝるゝ清光の廣大なるゝ對せるゝゝゝの
景氣を作ゝんゝも五十餘年のむゝしゝと
なゝゝぬゝゝゝみ豊國のゝゝのゝゝなる雲花
ほしゝゝ開耶姫の杉をゝみ乃ゝゝねゝせゝゝひ

て中世まもなく〜〜いつある禪宗とう
登山あゆ〜〜とく称〜の信しの早驚し
伝るさるにてもさ〜壮ん愛ず〜〜嘉む〜〜
君の四人なるまとほ〜わといふる
右を紀行海るとく句の需めにるよ送る

園屑漠

園あハ和名ハ字ちち波と列〜て数名物う
生てこゆ深山ふ〜〜くも甚し〜めあるゆ〜る

世ちゆ乃こ来れるを侍人さゆ〜に製作し
さゆ〜の名を設こく侍ふ立〜賦ふ〜〜ふこく
をのれ〜ら懐ひを述る嫌とハかせるあ長
さきそたちきふもいやーよにも列安くて愛
せ〜ふ此一品ふなむさるを瑠氏ら恩情の
遂さるを歌きてる碩ふの引るゆ〜筵中ふ
うちこゆれ〜西風を怨むとうひろ思ら
侍ゆてやとら俳乃宮めゆちとく又
捨るかといる一字あを添て秋の郭を也ゆ
かてハ考ふ四の嘉もなるものやうに

聞くにおいては甚だ益ある事
をあらんと法号武蔵の猛将乃木行光の
しるべを按ずるに越後法性院の庵主を頼ひ
鎧をとり身に受て法性院の庵主を頼ひ
よいこせ四人玉薫り紋つきたる旗の風にそ
更一撫も吹らるるやうにてもいかるも柱杖と
布の袋と此物とをとりて和尚のこうさいをむ
勧るに山の僧正坊い人を答るにうちあるき
こゝに善武の言有土俵の上にして岩井木村が
の人と鎖をとりて左右よりて必東西へ

法あり打うすをとりてむしるも盡
よしされと花り分の見るさまとの貴ら
れて業をとめぬさるるくも山崎の法師好
拍をとりしに平情躰よ高へく高号四窓
を義仮の調めよて見る淡とあんよ坐
不塩梅よりさわとくく又風味とく古うち
すまを匂も見調しとぬ見ぬ見えんとし高り
匂ひとくるこのをすひるすひるとり
なくして獨生の友とするのこ

月に打よ数に追つ拂ふ字紅波郎

十五夜月蝕

玉門より月蝕の詩を月を蝕するものハ月中
乃蟾蜍也と云ひ俚說も亦舊しとハ文忘て
いつゆ又天狗ハ月蝕のうゆ

久方の中なる枝をうつすてゆ
あなうらやむしの夢なりせう
うらうらせ給へて長嘯夫の盧ゆて同し說を
とゆ給ひしに同ゆ此中秋の其事あゆ大人ハ

歎惜し小兒ハ恐怖す
法ひうえんより四うなうなお月さま

俳德頌

慶長三年戊八月之衛殿下就山之九條殿下
玖山公ゆ法印玄旨の君法眼紹巴法橋
宗養ゆ仰ぎ俳諧一道の宗匠を相承
貞徳翁ゆ免許あゆしゆ爰ゆ二百年
未多ゆ日に盛んゆるゆも其故あゆ風月の

極にとゆく詩うも歌うもそれぞれ学べる書
のりうを学ぶすべは口明瞭にして嬉き
筆は皆俳諧の如くなるべきさまいやしき道
とおぼえし人もあれどやはり残りとおもはこと
をむしろよりいまも雲のうへかへりめ家家
歴々の御口ぶりを拾集にあまねく下情
をもたづねすべくなるべし乃徳なるすや
はたらくもたるべの枝葉のうへを楽するに
みつからく行歩ろうる程せ乃ひむ業にのり
老乃後健うもしてもまむ時これまのを

恥ぢ止むるをこるすして慶るをあり
序其服を調度を人数揃ハをして八百尾
せぬ遊ひあり是を皆揃ふて時を望ぢて
風雨なを妨られかねるよりれ設ける
いとつるを栄をてゆくあるをられまへりる
俳をひとつもあるすをを俳の徒あるすや
かれをう無山のおろ下鄙乃あり歴乃
まをまくもあるかしくつとく其中ハすを
をの徒ぢうちるり脇ぶもやとりあるく
るてての初をもたるをを里ふふよ枝を曳

くとて[illegible]る一友あり或日来りて
今天下の風流家を十の[illegible]て詩は其一分半
を得歌連哥は二分半や餘るといふは俳乃
ものたるゝめやつれたるそふいふと昇う
こめゝしくいつて世中度く大ひなるいて
う計得まき甚考の程はとまきかくまれ俳も
景情の人を感動せしむるにはこそ上中
下よわるゝゆく斯も事ふ人の多うあるとゝん
まは俗後平治何乃陋よ事うあゝむ
文政三年庚辰

九州題林集序

曲亭東桂川の春波うくゝ人のはまとひとも
を集めゝものゝそゝ秋風奔う年執ゆ
しは忘化了卯の年はなゆゝこみ弗水九ゆ
歌林と編ゝ稿のはゝめよ居士よまとゆ
てゝ乞ゝるは又叉乃此はるゆ其趣ゝ戊辰ゆ
ゝゝゆゝ十三夏をゝちゝゝゆ稿きる
句ゝの風姿の彩ゝゝと同ゝ志の友ゝちゝ

ちあきんとく著はせるなかれを外よこの葉の
加ふるまゝもなうはきても此編者の弗れい
まゝ波とハ同人なりやうも此序者の居士さて
秋風菴とハ墨人なりやとゝす知人こゝる十

即浄居士

一溪法師の豊東乃行を送る詞

四月十三夜竹二一溪を尋ねて彼の
後話ふこと更の錦繡しく出つさよ

ゆきとなゝす東豊の方よ趣なんこふさてる
あゝむるハ詞の餞帰よくほしとも法ひぬうけ
さりゝ別さて頓てうち卧るこゝろんるやう
此尊者いつくまても安住しく勢を掛て常
よ四方の志あれそいうへの大とこ達のうへ
ゝ進ふ概すこよ故事なるれと趣向
求むるハ求めるすしくなひもうけて

月花ゝ死の海乃外をゆけ

との一章をゆゝあくまうけうち森云て
考るに句こゝ紅しくこゝふも言外の所作

なめれども文字の數乃今ひさしくして幸ひのす
なるめるれども孝強してとゝまりうハ佛ゝの不
滅仙ゝの老たゝ說代るとも猶ゆ所とせる
取るも捨るもこゝる者の料理ゝゝ塵俗ゝ
沈める身ゝゝたゝてゝるをとゝ不ゝゝゝす
ゝまゝ楊秉ゝ三不惑ハ元來ゝる者の守ゝる寶善
提明鏡の樹ゝ非ゝす臺ゝゝゝゝるハ無てゝる
者の悟入せる所也返すゝも道心堅固ゝ且過
ゝゝまゝゝる道行ふゝゝゝゝゝゝゝゝハつ
向けゝまゝひゝせゝ十五年のゝふハ世ゝ年ゝゝゆ

羽ゝゝゝくもかゝらむゝゝて再會を期ゝてゝ情を
尉むゝゝ

ゝゝのゝゝゝひゝゝゝゝゝ日田乃水

文政六ゝ

駝岳黃句集敍

ゝゝゝ雜雜波ゝゝハ渠ゝゝゝ動窄ゝ羽のゝゝ事
あゝゝゝ机ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ績ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ駝岳ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

なるべし流義乃一隅をやしなう風調よく世に
世に推移るべく交り度く其傳燈を掲げ
来れる人部を祖意を悟りつべしいと
乙亥の春庵を寂をふるくるより遍境附
囑のぬし八千坊あり師の生涯の句を拾て
一集を編て七十翁の追慕とせんとや是まで
よく継ぎよく思る所あるべしと
いとまなくうち富嶽識るまて序の高吟
うれしく十餘年の因なるべしとて七十五歳の
敬を以て筆す

文政辛巳三月

三石亭諱

君ら代の幸吉波乃万とうめりるむ石の数を
かしこまる三つ子ゆりるる世ごとのおろし
けなるべき安くくくくに方丈のいちりむすひ
てミスの名をて味つくて童子花人なりゆるむろ
のかゆきうふ節宮鶴ハせ川義将ハ設けてそれら
勞をを忘れをすくく陰徳のまこと

よりて更に石を拾ひ好婦を得ん事の
ごとくれたるまなびたるものあるべしれどもこゝに
四面乃眺望四時の変化ハ自序に書されたるを
加ふるに業なしゝうも此石を起しゝ手うり
成さむ望ミハ杉せやまのたゝゝの山に鍬
ゝゆゝゝ杉脂茯苓形めを出つゝ黄初平う仙を
学ひて只いつまゝこゝ石亭に遊ひゝまんや
辛巳仲夏

跋

秋風葊裳句集二巻、當伯考中年
寛政丙辰ゝ歳門人金弗水選而
刻之、此編為其後集、俳句一巻、俳
文二巻、今茲文政丁亥、家君與弗
水及藤君未輯之、而上於梓、實
伯考没ゝ六年也、丙辰ゝ板、今已亦

存、蓋伯考不以俳求名、梓行之事、非其素意、刻既成、委諸書肆、無復改閲、終至於失亡、極可惜也、然伯考俳句、中年以後、頗変風格、識者稱其老而益進、此編所収、始丙辰、終辛巳、凡二十餘年、則前之所亡、亦不甚惜、至俳文成集、自古希有其

角諸老、而及近時、不過五六家、殊可珍也、嗚乎、古之立言者、必有子弟門人、編集之、考訂之、又随而鼓吹羽翼之、而後始得傳於遠也、伯考無子、視不肖建猶子、然建也以儒為業、不暇学俳、故當其生時、不能負荷其道、歿後亦不能助我父、以任編集考

訂〻勞、其謂之何哉、若金藤二子、可
謂不負本己、夫　伯考之名、噪於俳
林久矣、但隱居放言、不逸時好、故與
都六執牛耳者、不必相合、而年少後
進、務出新意、排擠前輩、以求勝、則
恐此編復蹈丙辰〻轍也、伏願、諸〻
君子、存在　伯考門者、嘗相識者、不

相識而相慕者、素不相慕、讀此編而
喜之者、相與鼓吹羽翼、而傳之於
數十百年〻外矣、天運巡環、無往
不復、世道一変、則鄉所以為俚、今以
為雅、彼所以為陳、此以為新、此編
雖低於前、必昂於後矣、安知其不
與桃青其角逐〻乎並立乎、嗚

呼家君老矣、建也不肖、此偏ニ存亡
通塞、將在ニ衆君子一、故我不自愛二我
言一、喋々焉云爾、

姪建拜書

一、去る三月中ふと思ひて舊き跡を尋ね
探らまほしかりしかども、ものぐるほしく
て、たつきも知らぬ山路に、まどひ
侘びぬるかなと、思ひ入れる方を辨へ
ぬ身よ仕出だすものよと、友なる人の
ある社事を入れ、笑ひいふ情ま

巻末の多数三十餘通の紙
を集作る二巻極系に至る情願大流
社行の略を信ずと其の孫を為
るふるき賞に感ずるに月化師社
文集上木あり一切余の託せる孫
已に亡れる時師の文章を彼里人
業を程修を蓋貫精神情典の

源氏の遺つる史の藻梁を探る或
源語の系社深潤を寡見最積者を
言を流少せる歌学一矣無孫
如諸命して吉翁の記天六ありて
を乃ち國と記法よりさる名
しいられよりさるなる
書と紀ち者師の清廉なる水もも

浅しき技志つたへん余花園主有しけれ
妓ぶをさへ筆にうつしとめてなき故旅し殊子
雀躍に従ひて大江の峰に筆を染西
河我社清らなる我擢ひ教へ子我
題すといふ天保四癸巳菊月の日 一山盲不人

鶴鶴羽ま よゝ人の心とも安の葉をむ拾
これ人として細か[illegible]よく
これにしても富貴は笑しからや
氣性僻みして風雅をこの[illegible]
その[illegible]風雅によ[illegible]
よつて[illegible] 文作庚午[illegible] 自[illegible]
[illegible]やら[illegible]たよりて[illegible]
学ひ句[illegible]雅[illegible]騒[illegible]
中の[illegible]研究[illegible]
[illegible]の[illegible]もの

師はさきのかきなかとも志ハ十とせ
あまりのむかしよりおもひいりつゝ
笑翁のこゝろをたつね侍り さるを師
さう年みまかり玉ひて 師ならひ
ぬれとも猶しほそよりし 蘇東坡なやとに
諸つくりの三昔言うやきりし猶ひとりハ
あまあまといさ絶はいきさきつゝも わ
たのしや 又ある付ありくてくし おこなひて
陸翁のうつしお日もうつされとやその
浪花にてまちて あまた年をまち

久しくおもひくらし さき諸つて 湖何
みちのくにとこゝろさしても 草に延度大
ちかのしかひちすら 祝部の都にて母譲も
あすみをとめ 膳月に晦やあかる好
さらし入りこゝちもやしに忘れすてに
山に端ちらし日影 よそにまかりハ
蕉上乃雲路をも まなとれより諸子を
宗祇子ハいふも更なり 句集になりて
浪花乃言の葉かとする 歴あるゝ
みなん さりしと九年乃路とりおもひ世

[illegible]も[illegible]あり[illegible]を[illegible]
陸奥風流[illegible]
[illegible]
筑紫[illegible]
[illegible]集入[illegible]
[illegible]堆[illegible]
空[illegible]
[illegible]
[illegible]高[illegible]
[illegible]と扶[illegible]

[illegible]
三人[illegible]
[illegible]
[illegible]白楊[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

文雅子の俳集又おくさまの
門葉乃人〻おもひ〻の句合も
とりのきんなんこれるおさまるあし
かくいつさとさとあきうる井水の高平と
さしもとおみ
鳴ぬるよりまわさちもれとあふちち
言もきのさりきもと崩んとるるいけ共
れのを風雅乃生理の神ときく
ふまねやしれ因〻ほきもとして志を
進ていさうあ迷ものいさもあ愛と捨う

神をあるて家をおるる事を
祈ふ〻

文政癸未仲秋　宜春亭玉果述

友人　朗郁書

甲四号十九号